

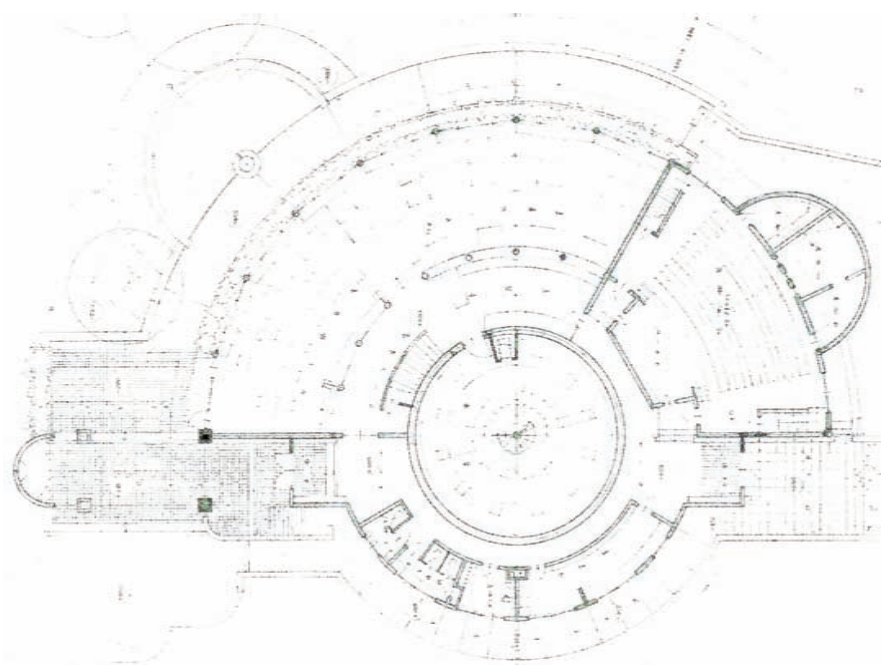
ごあいさつ

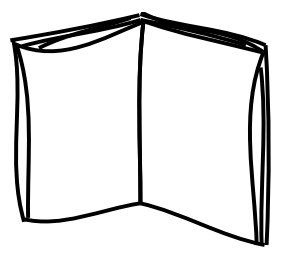
このたび、羽仁両先生記念図書館は改修工事によって、自由学園の一貫教育を支える総合図書館として生まれ変わりました。私たちは、記念図書館が新たな一歩を踏み出すこの機会に、学園特別実習での学びの集大成として、リニューアルオープン記念展示「自由学園図書館のあゆみ展」の企画と準備を行いました。

この展示は自由学園図書館のはじまり、記念図書館設立までの道のり、これからの図書館という3つのテーマ構成となっています。また、この建物について取り上げたコーナーを設け、ここでは主に、建築家の遠藤楽氏が円形の図書館を設計するまでの軌跡を取り上げています。この記念展示を通して、自由学園図書館の過去、現在、そして未来を知っていただければ幸いです。

2010年5月14日

2009年度 学園特別実習 図書・記録グループ
浅野 開渡・古川 太一・泉水 友恵・堀田 真利子





自由学園図書館のあゆみ

各部図書室期

1921年	4月	自由学園創立
1924年	2月	食堂のファイアブレスの上にある棚を本棚として利用しはじめる (現明日館)
1927年	4月	小学部 (現初等部) 創設
1931年		女子部委員会に図書委員を新設 初等部第一校舎の廊下棚に本を置く (子供の図書館)
1933年		久留米村 (現東久留米市) の学園セツルメント建物増築により図書室を開室
1935年	4月	男子部創設
1936年		生徒による図書目録の作成が試みられる
1939年	1月	幼児生活団創設 男子部校舎の四年教室と対するところに図書室を開室
1949年	4月	男子最高学部開学
1950年	4月	女子最高学部開学
1952年		学園特別実習「図書・記録グループ」の前身となる活動がはじまる
1954年	3月	女子部32回生「歴史グループ」により、女子部食堂横の小部屋に記録室を開室
1955年	10月	羽仁吉一逝去
1956年		女子最高学部による「図書グループ」が発足 男子最高学部と女子部にそれぞれ図書室を開室

中央図書館構想期

1956年	11月	中央図書館構想が起こる 蔵書カードの一元管理が試みられる
1957年	4月	羽仁もと子逝去
	6月	新学園長に羽仁恵子が就任
1958年	2月	羽仁両先生記念感謝金の呼びかけがはじまる
1959年		中央図書館構想に基づく図書の一元管理検討段階へ入る
1963年	2月	図書館建設を控えて現記念体育館の土地に農芸小屋および畑の移転をする
	7月	協力会総会にて、学園長・羽仁恵子から図書館建設について発表される
1964年	5月	図書館の建物について、建築家・遠藤楽氏と学園長などにより相談が重ねられる
	6月	図書館第一案 (四角形・閉架式) の敷地図を示した絵葉書を配布
	8月	図書館設立に向けて正式な募金を開始する
	9月	遠藤楽氏、欧州を旅する (9月14日~11月23日)
1965年	1月	図書館第二案 (四角形・開架式) の設計案が出来る
	3月	図書館第三案 (円形・開架式) の設計案が出来る 第三案のもと図書館建設工事着工 (遠藤楽建築創作所・大明建設)

確立期

1966年	5月	羽仁両先生記念図書館落成	蔵書数の変遷
		国文学者の岡野弘彦作歌、学生作曲の「泉のある図書館」を落成式にて披露	7,494冊
	6月	生徒が記念図書館の蔵書や利用者について日誌を付けはじめる 係の生徒による「図書月報」が発行される	
1978年		女子最高学部の「図書グループ」と「記録グループ」が合併する	14,418冊
1980年頃		記念図書館の建物の一部にあったアスベストを除去する	15,688冊
1990年	6月	蔵書管理システムをコンピュータ化、図書管理ソフト「情報館」の導入 建物の老朽化に伴い、記念図書館改修要望書を提出	24,867冊

変革期

1994年	4月	記念図書館の利用方法変更により、高等科の生徒が書庫に入庫可能となる 図書管理ソフト「情報館」による貸し出し管理を開始	30,279冊
1995年	12月	各部図書室の普通科 (現中等科) 図書を記念図書館へ移管	31,754冊
1996年	12月	女子部中等科、男子部中等科の生徒が記念図書館の利用を開始する	33,713冊
1999年	4月	男女共学の新最高学部が発足	39,777冊
2000年~		中高生向けの図書資料を中心に整備拡充を図る	41,616冊
2002年	4月	自由学園資料室が発足	44,912冊
2003年	3月	男子部のコンピュータ室整備に伴い、男子部中等科図書を記念図書館へ移管	46,612冊
2006年	4月	学内に図書館問題検討委員会が発足、記念図書館改修について検討を開始する	51,427冊
2008年	7月	理事会で記念図書館改修工事が決定される	55,052冊
2009年	6月	記念図書館改修工事着工 (袴田喜夫建築設計室・白石建設)	58,591冊
2010年	2月	記念図書館改修工事終了	
	5月	羽仁両先生記念図書館リニューアルオープン	

写真で見る自由学園図書館のあゆみ



明日館食堂のファイアブレスと本棚



女子部食堂上の図書室(1956年)



図書館建築風景(1965年)



完成後間もない記念図書館(1966年)



中等科図書を移管し蔵書も充実(2008年)



改修工事を終えた記念図書館(2010年)

生活空間にとけこむ図書室

～自由学園図書館のはじまり～

自由学園の校舎の中心には食堂がある。食堂は、生徒と教師が一堂に会する、学園生活における中心とも言うべき場所だ。そんな食堂の中央に位置する暖炉の上には、木製の書棚が設けられている。この書棚が自由学園図書館のはじまりである。それは図書館と言うよりも、家庭にある書棚と言ったほうがふさわしい、生活空間にとけこんだ温かみのある場所であった。

当時の蔵書は、羽仁両先生をはじめとする諸先生方から寄贈されたもので、ベルの蔵書印が押されたその本は、現在も手に取ることができる。そんな蔵書の貸出や管理は委員の生徒が受け持った。「もっと私たちの図書を利用してほしい」という呼びかけが『学園新聞』や『学園週報』でなされ、また、戦後間もないころにはアメリカの大学から図書が寄贈され、蔵書に加えられたこともあった。

創立者の、「本が私たちの生活の中に入って活かされるようにしたい」という考えのもと、「家庭にある書棚」は各部の図書室へと広がっていった。

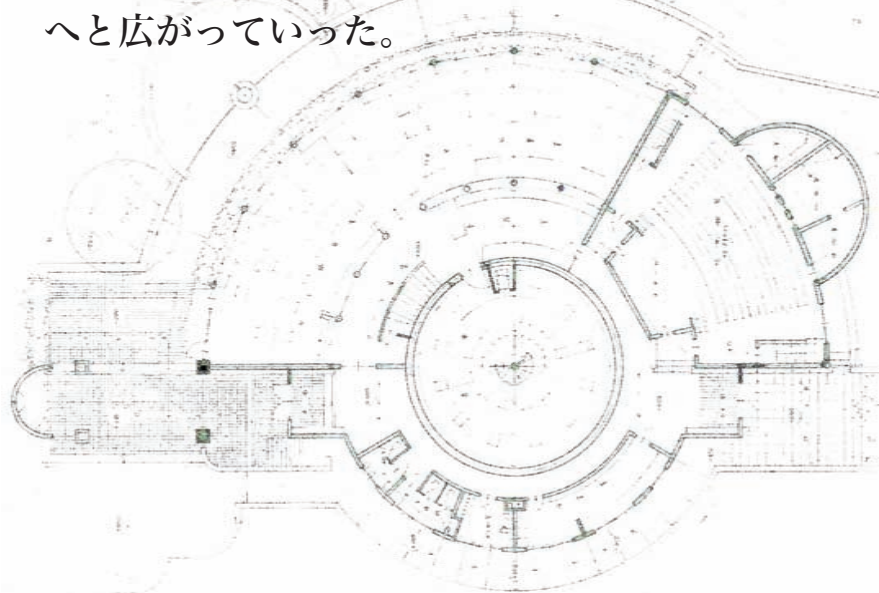
創立者の、「本が私たちの生活の中に入って活かされるようにしたい」という考えのもと、「家庭にある書棚」は各部の図書室へと広がっていった。



食堂の暖炉の上を書棚に（現明日館）



1948年 寄贈図書を手にして喜ぶ生徒

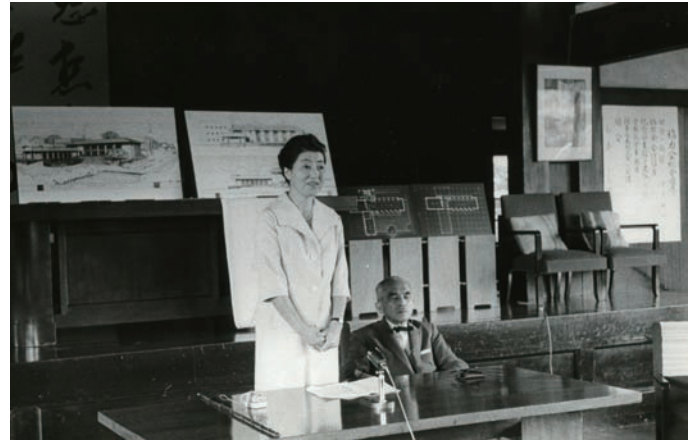


図書室から図書館へ

～羽仁両先生記念図書館の設立～

1949年に男子最高学部、翌年には女子最高学部が開学した。女子最高学部にはグループ勉強として図書・記録グループが発足。グループの学生による図書管理、学園史記録の整備が進むと共に、学園の図書館管理を一元化する、中央図書館構想が練られた。

1958年、羽仁両先生亡きあと、さらなる自由学園の発展を目的とした、記念事業のための「感謝齋金」が呼びかけられ、土地購入や校舎増築などの費用に充てられた。1963年、当時の学園長・羽仁恵子は、この事業の最後として図書館の必要性をうったえた。



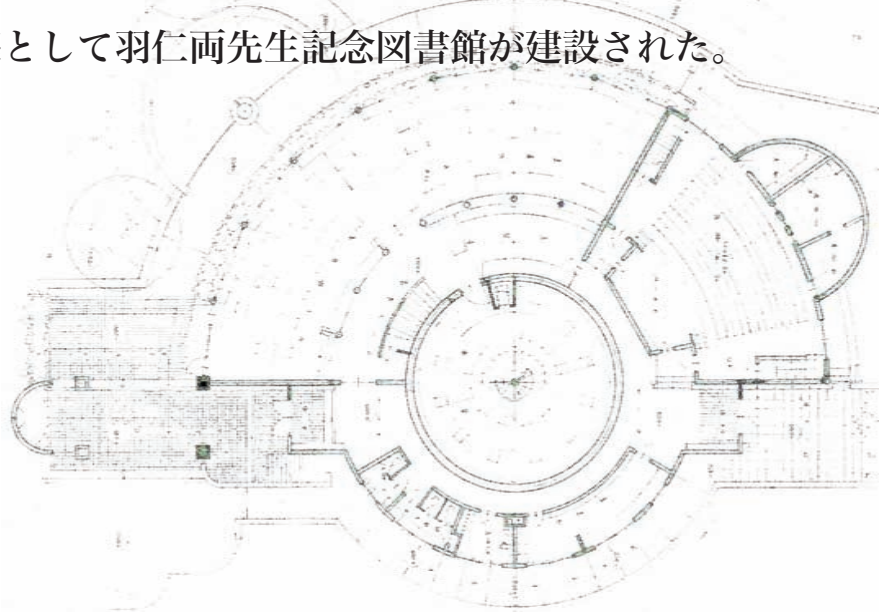
1964年 協力会総会で設計案を発表する恵子先生



1954年 女子部食堂横に記録室を設置する

一方1960年代の日本の図書館は変革期を迎えていた。戦前の図書館は図書資料に利用制限があり、これが利用者中心の図書館へと発展しつつあった。このような時期に自由学園図書館の設立が検討されていた。学内では、自由学園にふさわしい図書館の設立を目指し、図書館学の専門家や建築家と協議を重ねた。1966年、自由学園

の発展を目的とする記念事業の建築として羽仁両先生記念図書館が建設された。



自由学園の情報センターへ

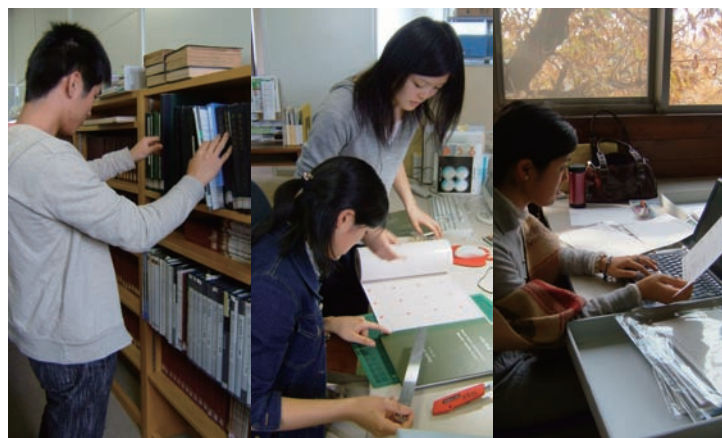
～総合図書館としての新たな可能性～

1990年代以降は図書館の大きな変革期と言えるだろう。学内でもいち早くコンピュータが導入され、それまで手書きで行っていた図書登録作業や貸出業務を、徐々にコンピュータによるデータ管理へと切り替えた。94年からは各部にあった中等科図書室の本を



1993年 事務コーナーにコンピュータを導入

順次移管し、中等科生徒も図書館の利用を可能とし、中等科から最高学部までが利用できる、全校のための「中央図書館」となった。最高学部生向け中心であった蔵書構成も、2000年以降は中等科・高等科向けに「読みもの」などの充実をはかり、利用の幅を広げてきた。



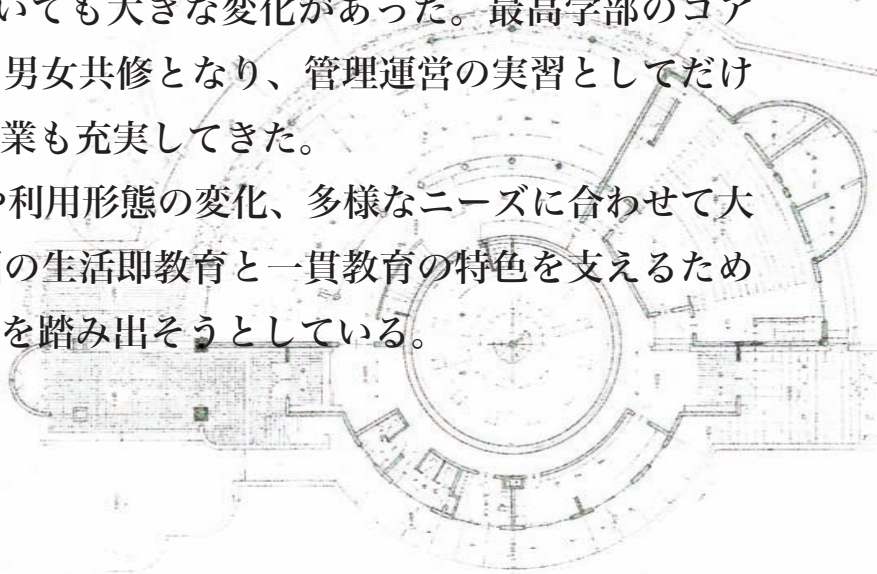
学園特別実習の活動 2006年度から男女共修へ

2002年には、自由学園のアーカイブズ管理を行う「資料室」が発足。図書資料と記録史料—アーカイブズ—をもつ図書館として自由学園図書館の特色を豊かにしている。

最高学部のカリキュラムのひとつである学園特別実習（選択必修）

「図書・記録グループ」の活動についても大きな変化があった。最高学部のコアカリキュラムとして時間数が増え、男女共修となり、管理運営の実習としてだけでなく、利用者のための資料整備作業も充実してきた。

そして2009年、建物の老朽化や利用形態の変化、多様なニーズに合わせて大規模な改修工事を行った。自由学園の生活即教育と一貫教育の特色を支えるための総合図書館として、新たな第一歩を踏み出そうとしている。



記念図書館建築案の経緯

～四角形から円形へ～

当時の学園長・羽仁恵子からの依頼により、建築家・遠藤楽氏（1927～2003）は、自由学園図書館の設計をした。遠藤氏は短期間のうちに三つの案を提示している。

- 1964年 6月 協力会総会で自由学園図書館計画概要発表
 <第一案：四角形・閉架式>
- 同年 9—11月 遠藤氏、ヨーロッパとアメリカへ視察
- 1965年 1月 <第二案：四角形・開架式>発表
- 同年 3月 <第三案：円形・開架式>のもと着工
- 1966年 5月 自由学園羽仁両先生記念図書館 落成

遠藤氏は、学校図書館法に則った設備機能の整備と同時に、「既成概念なしで全く自由学園にふさわしい」図書館を追求した。自由学園の教育方法、キャンパスの特性を活かすためのさまざまな試案が検討された。

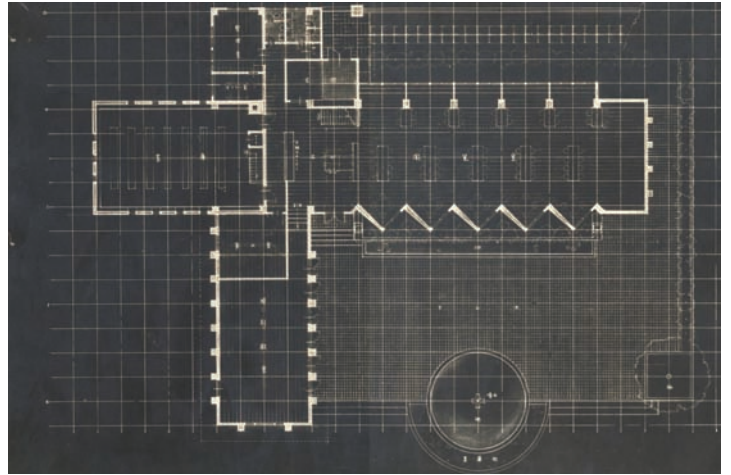
第一案から第二案への変更について、遠藤氏自身の言葉は残っていないが、閉架式から開架式へという動きが読み取れる。戦前の図書館システムでは、一般利用者は自由に本を手にとることが出来ず、必要な本を職員に頼んで書庫から出してもらっていた。こうした図書館のあり方が、利用者のための図書館へと大きく発展し、開架式図書館が主流になる1960年代、この時期に自由学園でも図書館建築が行われた。

第三案での大きな変更点は、四角形から円形への形状の変化である。父である遠藤新氏が創立者とともに設計した自由学園3万坪のキャンパスには、どのようなコンクリート建造物が可能か— 遠藤楽氏は次のように述べている。

「威張らずそして力強く、しかも周囲の環境にとけ込ませることが私の念願だった。その結果このゆるやかにふくらんだ台地がそのまま育ったかのごとき形が生れるに至った。・・・ここに生まれる教育が波紋のごとくに広く社会に広がってほしいその気持ちを表現しているつもりなのです。」 『建築文化』1966年7月号

第一案 1964年6月5日発表
形状 L字(四角)

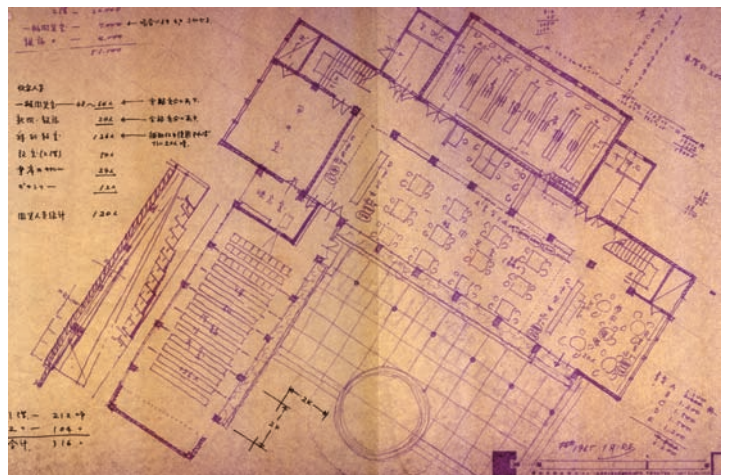
- ・玄関が女子部講堂側にある
- ・書庫が事務室の裏にあり、
利用空間と書庫が分離(閉架式)



第一案の建築図面

第二案 1965年1月9日発表
形状 L字(四角)

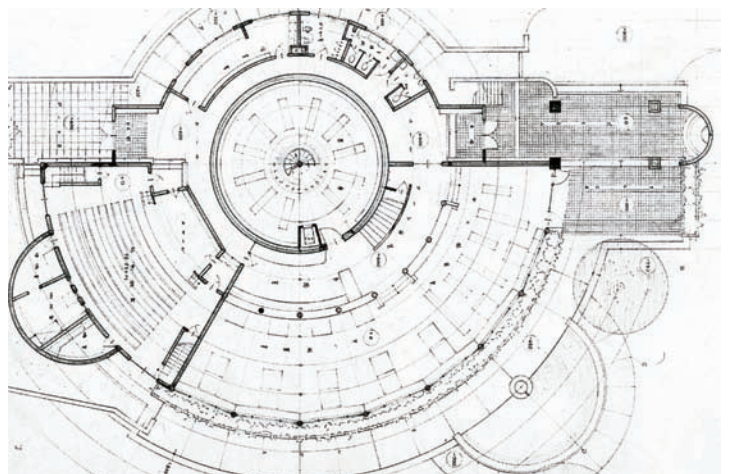
- ・書庫の配置変更、
利用空間と書庫が隣接(開架式)



第二案の建築図面

第三案 1965年3月発表
形状 円形

- ・利用空間と書庫の隣接関係は
第二案と同じ
- ・キャンパス空間にとけこむ
土地の起伏に沿った円形



第三案の建築図面